

2173再構築 23

10 マルクト : 王国

エリー

10マルクト:王国

法律の大元を変えるためには、保護区の16歳以上の大人の全員投票で、2/3以上の賛成を得ることが必要。その投票は無記名でよい。

区長を決める、村の投票も、最初は挙手を想定していたけど、無記名に変えました。

話し合いもするが、それでは決まらない時は、最後は選挙で多数決をとる。

そうなる、「話し合う」とはなんなのか、という問題が持ち上がる。

わたしが考える、「議論を深める」については、後で書きます。

保護区の制約から、お金で自由を買って解放された自由区は、毎年、都市単位で負担金を払う。

負担金を払える経済力がある地域が自由区となり、払えない地域は保護区となる。

100万円を1票として、集めた票数に比例して、発言権を得ることができる。

たとえば、10億円を負担する場合、

$$1,000,000,000 \div 1000,000 = 1000$$

となる。

最低でも、1000票あつめなければならない。

もし、10億円以上あつまったなら、一票の重みが軽くなる。

1000万円が100人、2000万円が10人、3000万円が5人としよう。

$$10,000,000 \times 100 = 1,000,000,000$$

$$20,000,000 \times 10 = 200,000,000$$

$$30,000,000 \times 5 = 150,000,000$$

合計 1.350,000,000

つまり、13億5千万円。

1000万払った人は、0.007の所有率となる。

※桁がでかすぎて計算が間違っているかもしれないが、たぶんあっていると思う。

10億に対して1000万払っても、発言権としてはすごく弱い。

しかし、1000万の100人が、同じ意見なら、10億のパワーがある。

3000万に勝つ。

もし、10億を一人で用意して、他に誰も払う人がいなかったなら、その人は、その都市の王さまのような存在になる。

負担金全額でなくても、100万でも、1000万でも、3000万でも、自分の稼ぎから払ったなら、その人は貴族的な立場と言える。

誰に遠慮なく、自分の思いを主張するだろう。

もし、クラウドファンディングなどで、たくさんの人から少しずつ集めたお金で発言権を買ったなら、平民的な立場に立つ。

みんなの代表。

王さま的な立場の人が、さらに進んで、いくつもの都市の負担金を払ったなら、それだけ大きなことができる。

お金を稼ぎ続けて、負担金を払い続けることができなくなれば、発言力は失われる。

つまり、事業の失敗は、発言力の喪失を意味する。

国際都市は、国内都市に比べて、負担金が多い。

具体的にいくらに設定すればいいのかは、分からないし、お話の中には出てこないの、決める予定もない。

基本は、多く稼いだ企業に払ってもらう。

その状態でよければ、何もしなければいい。

その状態で不都合があるなら、代表して発言する人を決めて、その人に少しずつお金を出し合うことで抵抗する。

税金って、今は無条件に強制的にとられる。

それを、発言権を買うために払うように変える。

誰でも、自分の都合がよいようにしたい。

全体のために、自分を殺して、公平な判断をすることを期待することは無理な相談。

誰が考えても同じ結論に達する部分は歪みが少ないが、どちらでもいい部分は偏りが大きくなるから。

それなら、自分の都合を通したい人に多くのお金を出してもらって、それに対抗したいなら、

みんなで少しずつお金を出し合って、つながりの濃い代表を送り込む方が、拮抗した関係になれるのではないだろうか。

もし、お金持ちが潤うことで、下まで広く潤う、シャンパンタワーのような流れが本当に起きるなら、お金を多く稼ぐ人の意見を通すことが、全体の利益に反するとは限らない。

発言権を持つ人が、多くの人の利益に反することをしたなら、お金を集めて、抵抗すればよい。
少数と、それ以外なら、それ以外の方が多いのだから、数は力になる。

負担金は、保護区と管理区を維持するためのお金だから、自由区を運営するお金は含まれていない。

自由区の運営費は、発言権の強い人の考えに影響を受ける部分。

公営でやるのか、民営でやるのか。

公営で適正な価格なら、抵抗は起きないだろう。

公営で高すぎるなら、抵抗する必要が出てくるだろう。

民営で競争させるなら、サービスを組み合わせて自由に買うことになるだろう。

もし、利益にならないことは切り捨ての方針を打ち出したなら、抵抗する必要が出てくるだろう。

どちらにしろ、自由区で暮らすためには、お金を払わなければならない。稼ぐことが求められる。

昔は、お金を持っている人しか、選挙権がなかった。

今は、無条件で与えられている。

勝ち取って得た特別な権利だ。

それなら、与えられた権利を行使するために、代表者についてよく調べて、考え抜いた一票を投じているのか？

すくなくともわたしは、そうではない。

よく知らないまま、なんとなく、あっちにいたり、こっちにいたり、投票には行くが、答えは分からないまま。

ここで、「話し合い」の話に戻ろう。

「こうなってほしい」と思うことと、「どう実現するか？」の間には、具体化という作業が入る。

国内の治安を守る、警察は、「必要だ」と受け入れられている。それは、実際に犯罪が起きているからだと思う。

「戦争状態ではないのに、軍隊は必要なのか？」と問われたら、意見はわかる。

わたしは、こちらから攻撃するのは反対だが、むこうが攻撃してきたのに、抵抗できないのはどうかと思うので、必要なんじゃないかと思う。

「でも、武力があったら、使いたくなるだろう？」という問いには、「軍国主義に戻るのは嫌だよ」と思う。

答えがでない。

防衛のために準備するのは、政治家の責任だと思う。

でも、その政治家が、武力を乱用しないように見張るのは、国民の役割。

じゃあ、国民の一人であるわたしは、どうやったら乱用しないようにできるのだろう？

考えてみたが、分からなかった。

「こっちからは攻撃しないが、攻撃された場合に備えてほしい」が一応意見だが、それを意思表示するといっても、別に誰も聞いてないし、誰にどう言えばいいのか分からない。

「戦争反対」というデモに参加しようと思わないのは、自分から攻撃していくことには反対だけど、攻撃されて反撃して、戦争状態になることは、こちらの意志でどうにかなる問題じゃない。

「それでも反対を貫いて、やられっぱなしでもいいから、戦うこと自体を放棄する」と言われたら、う～んってなる。

それだと確かに、殺すことはしないが、めちゃくちゃ死ぬと思うから。

兵法の本では、戦わないで、「負けました」と言わせるのが、一番よいと言われている。

そういう「努力」はしてほしい。

それでもどうにもならなくて、戦いに突入するなら、短期間で、最小限の被害で勝つことを願う。

しかし、そのために大切な人が兵士として徴兵されてもいいのかと聞かれたら、嫌だなと思う。

だからといって、お金で傭兵を雇うのも違うと思う。死ぬのが他人ならいいのかって思う。

「その時」がきたらどうするのか？

正直いって分からない。

こないでほしいと祈るだけで、何もしてない。

決めるのがわたしでなくてよかったと思うくらい、どうしていいのか分からない。

一つ一つみていったら、全部、「そうだね」と思う。

しかし、全体で見たら矛盾するわけで、その矛盾をどう解消するのが問題。

聞きたい議論。

「戦争に導く気なんですか？」は、こちらから積極的に攻撃するのかと聞いているようにみえる。

それに対する答えは、「そんなことは言っていない」だから、「防衛に徹する」を意味するように思える。

では、攻撃された時はどうするのか？

反撃するのか、しないのか。

反撃しないなら、被害をどう防ぐのか。撃ってくるミサイルを撃ち落とすことはするが、こちらからミサイル基地を攻撃しないで、「撃てる状態」を黙認するのか？

二度と撃てないように反撃するなら、ミサイル基地だけを壊すのか、敵地まで乗り込んで戦闘をするのか？

実行に必要な人間を、一般から徴兵するのか？

そういう部分が聞きたいこと。

わたしは、女で、精神病もあるから、まず徴兵されることはないだろう。

だから、自分が行くというより、送り出すことを心配する。

父はもう70近いから行かないだろう。

兄は40代だから可能性がある。

50代の櫻井さんも心配だ。

万が一に備えて、自衛隊を持とう、にはそうかなと思う。

しかし、万が一に備えて、徴兵の仕組みを整えよう、と言われたら、理屈は分かるが、感情的に抵抗がある。

相手に、なめられないためには、「力」が必要と言われれば、そうかなと思う。

しかし、力の一部になることを求められたら戸惑う。

戦争に、賛成か、反対か、聞かれたら、反対と答える。

しかし、反対したらやめられるものなのだろうか。

相手があることだから、こちらが決めることはできない。

実務者になったら、分からないことに対応するために、あらゆる可能性を考えて、準備することが求められる。

準備することで、戦争を誘発してしまう、という考え方もある。

じゃあ、丸腰でいて、起きてしまったら、どうするのか、という不安もある。

その堂々巡りの問題を止めるものは、「信頼」だと思う。

準備しないというのは、現実的ではないと思う。

「準備はしても、こちらから攻撃する、軍事国家にはならない」と信じていることができるかどうか。

それは、国内にも、国外にも言える。

「こちらからは攻撃しないと宣言して、実際に先制しない」という態度をとり続けることが問われているのだと思う。

日本は、先制したことがあるから、過去を持ちだされれば不安をあおる。

しかし、それは、どの国にも言える問題ではないだろうか。

そこをどう信じてもらうかが、外交であり、政治家の仕事なのだろう。

会いにいたり、招待したり、いろいろな国と幅広く交流する。

そう考えると、日本の政府は、外交しているなって思う。

そんなに出さなくても、と思うくらいお金も出している。

戦争になっても対応できる準備をしていて、でも、外交で戦う前に解決できたら一番いい。

しかし、そこで解決せず、準備が役立ってしまったなら？

準備してなければ混乱するだろう。

しかし、準備していたら、戦争に誘導したと批判されそう。

もし、わたしが決断しなければならぬ立場にあったなら、どうするだろう？

隠れて、準備する。

計画を公表はしないが、行動できるように考えておく。

もし、政府と国民の間に信頼関係があって、「万が一の備えであり、戦争が現実にならないように最大限の努力をする」という主張を信じられるなら、国民だけに言う。公表はしない。

もし、他国との関係が良好で、「これは準備であり、侵略のためではない」と信じてくれたなら、「こちらからは攻撃しないが、攻撃されれば反撃の準備はある」と宣言する。

結局、真実を語るには、信頼が欠かせない、ということなんだろう。

共謀罪の話もそう。

「毒ガスをまくことを事前に防いでほしい」という賛成よりの立場も、「行動にうつしてない段階、考えただけで罪に問えたら、拡大解釈して、権力に都合の悪い、無実の人を捕まえるのではないか」という反対よりの立場もある。

それぞれの意見には、正しいところがあるから、一つ一つには、「そうだね」と答える。

しかし、知りたいのは、災いを未然に防ぎ、かつ、権力の乱用も防ぐこと、であって、どちらかを選ぶことではない。

「共謀罪は、思想統制に至る危険性がある」という指摘には、そうならないように運用するためにはどうすればいいのか考えて欲しいと思う。

それに対する明確な答えはない。不安になる指摘ばかり目につく。

反対の立場に対しては、では、どのように災いを防ぐのか提案してほしいと思う。

今ある法案で十分、という説はその一つ。

でも、それならなぜ防げなかったのか、という疑問が残る。

賛成の立場から、賛成する理由を語り続けたり、反対の立場から、反対する理由を語り続けて、相手に自分の主張を認めさせようとする、「主張のし合い」が見たいのではない。

互いに相手の話に乗った上で、不備を埋めていって、内容を深めた上で、最終的な判断を下して欲しい。

「賛成ですか、反対ですか、どちらか選んでください」は、望んでいない。

どちらの問いにも答えられる、好きのない対応を求めている。

切り離して、バラバラに見れば、一つ一つはすべて正しい。

しかし、両立するためには知恵がいる。

その知恵のある人に、政治家になってもらいたい。

言われればなんとなく分かるが、「そうかな」と漠然と感じるだけで、よく分からず、結論がでない。

手の届く範囲で精一杯。

そういう気持ちも分かる。

決めなければならないことを決めて、準備すべきは準備して、好きなことだけでなく、必要なことをする。

そういう生き方をする人がいないと、秩序が保たれない。

その一方で、どうせ死んでしまうのなら、嫌いなものに割く時間はもったいない。好きなものに囲まれていた。

そういう欲望は誰にでもある。

必要は、政治で求められること。

好きは、人として求めるもの。

それぞれ別々に考えたら、どちらも正しい。

でも、二つは対立する。

その対立を解消し、どうバランスをとるか。

そこが問われている。

システムに興味はあっても、実行力に欠けるから、「わたしがやります」と手をあげることはできないわたしがいる。

分からないにも関わらず、選ぶ権利を持つわたしがいる。

「できる範囲で必要なことに参加しつつ、好きなこともする」が「求められる姿」であって、人によってその配分は違う。

保護区は、必要寄りの世界。

自由区は、好き寄りの世界。

寄っているだけで、それだけではない。補う部分がある。

どちらを優先するかは異なるけど、どちらもある世界。

「間を埋める話」が、たぶん、書きたいこと。

若いころのララは、「好き」を第一に考えて、必要は誰かがやってくれるという曖昧な生き方をしていた。

必要なんだという自覚がなかった、という方が近いかもしれない。

好奇心を満たすために生きてきた。

貴族的な立場の「発言者」と出会って、意識するようになる。

最終的には、必要を担うために、保護区に入ることを決意する。

話は急に変わるけど、カレー煮込みうどんを食べたのよ。

テレビでは、生卵にうどんをからめて食べていて、すごく美味しそうだった。

でも、実際に店に行ったら、味玉が美味しそうで、それを選んでしまった。

確認しなかったのが悪いんだけど、生卵は入ってなかった。

味玉は美味しかった。

汁まで飲み干せないのだから、味玉の方がよかったかもしれない。

でも、生卵をからめたらどんな味がするのか、体験できなかったのがすごく心残りだった。

理屈で裁いたら、「自分で選んだ結果なんだから、誰のせいでもない。自分の問題。グズグズ言うな」となる。

占星術だと、風が強くて、水が弱いわたしは、まさにそんなタイプで、自分で自分を黙らしてきた。

でも、いろいろ学ぼうちに、それは体によくないと思うようになった。

たぶん、水が強い、情の人なら、「あるある」とか、「分かる～」とか、共感を示して、「だから何なのよ」的な話を受け止めてくれると思うのよ。

言ってもしょうがないことだけど、語ることで、「そんな気持ちも存在した」と認められるみたいなの。

保護区は、給食制だから、選べないので起こらない問題。

でも、おやつをネットで選ぶことはできる。

そしたら、やっぱり、美味しかったとか、美味しくなかったとか、自分で選んだことにもかわらず、「微妙な気持ち」になることはあると思う。

あるいは、一緒に食べて、「美味しいね」とか、「美味しくないよ」とか、言い合ったりする

。

それを禁じられたら、苦しいと思う。

わたしは、わたしを理屈で裁いて我慢を求めていたから、どんどん苦しくなっていた。

いつまでも迷ってメニューから選べないのも困るけど、自分が決めたんだからと、矛盾や曖昧さを、分かりやすい型にはめて殺すこともしない方がいいと思う。

でも、必要を満たすという行為は、白黒つけて、秩序を保つことだから、表立っては言えない

。

あくまで陰の部分。

その陰と向き合うのが、占い師とか、相談役なんだと思う。

あるいは、友だちや家族。

職場の人には言わない部分。

家族でも言えない、もあれば、職場でも言える、があるかもしれない。

でも、どこかで言えることが求められると思う。

そういう話は自分の中にためて、他人には吐き出さないタイプの人もあるが、多くの人は共感し合えることを求める。

律した後の折り目正しい自分ではなく、丸ごとの形のない自分を受け止めてくれる人を必要とする。

未来予測とカウンセリングなら、カウンセリング寄りの占いをするから、そう思うのかもしれない。

わたし自身は、白黒つけて、矛盾なく、言動を一致させた行動をするように親に求められて、自分自身もそれをいいことだと思って、グルグル渦巻く、曖昧な感情を殺し続けて、怒りや悲しみに支配されていたけれども、占いの勉強で救われた。

何に、どう、怒っているのか気づけたから。

「占星学」(リズ・グリーン(著),岡本翔子+鏡リュウジ(翻訳))の中に出てくる、火・土・風・水の話がすごく役立ちました。

それでも、やっぱり、自然に生まれる感情では、裁いてしまって、「どっちなんだよ!」と突っ込みたくなる自分がある。

「なに訳の分からないことを言うんだ」と否定的に見てしまう。

「そんな時もあるよね～」みたいに、共感できない。

それでも昔に比べて、理詰めで責めないで、共感まではいなくても、「ふーん」と流せるようになったけれども。

だめならだめでもいい。とにかく知りたい。経験したい。そう思っているから、決めることが軽いのかもしれない。

失敗したくない、とあまり思わない。

「知らないままはいや」と動いてきたから、失敗は多い。

「なんて、わたしは考えなしのアホなんだろう」と後悔していたが、「あの時やっていれば」という後悔はない。

どっちがよかったのかは、今でも「まず行動」が直ってないので、よく分からない。

「思いつきで動くなよ！」とたまに思うが、考えすぎて動けない人を見ると「それも苦しいよな」と思う。

他人の気持ちに寄りそう時には、自分の気持ちから離れなくてはならない。

自分が言いたいことではなく、相手が知りたいことに答えつつ、先の展開を意識する。

自分をコントロールするのが、意外に難しい。

わたしは、なかなかできなかった。

今の状況を飛ばして、先話をし過ぎてしまったり、今の感情に気づかず、あるべき姿を押し付けてしまったり、よく感じとれてなかった。

今でも、うまくいかない時はある。

でも、揺れる気持ちとか、矛盾する思いとか、形にならない感覚とか、そういうものを自分で自分に許せるようになったら、他人の動揺に混乱しなくなった。

小さいけど、大切なこと。

いくら、難しいことができて、合理だけで、まるごと自分を受け止められないと、行き詰ってしまう。

一人の人と丸ごと付き合うことは、世界と向き合うことと、どこか似ている。

どちらも大切で、どちらも必要。切り離せない。

ララは、占い師として生計を立てているなら、そこは基本だから、出来て当然。

成長物語として書けない部分。

成長した上で、何を言い、どう振る舞うかが、問われている。

作者であるわたしが、子分気質で、人の顔色見て、ドキドキしている性質のままでは書けない。

わたし自身が成長しないと書けないのだと思う。

果たしてどんな態度を知るために、参考になりそうな本「心理療法の光と影 ― 援助専門家の<カ>ユング心理学選書 2」(A.グッゲンビュール・クレイグ(著),樋口和彦(翻訳),安溪真一(翻訳))を買ったので、読むのが楽しみです。

あとがき

生命の樹に沿って気軽に書き始めて、途中、「自由は死を伴う厳しいもの」とか、厳しいことを言いたくなくて、すごく悩んだ時期もあったけど、なんとか最後まで終わりました。

明日から、買った本を読みつつ、ララの6歳から26歳のシナリオを120分で書く予定です。
。ここまで書いて考えたことを生かしつつ、2017年12月末までに完成させたい。

それが終わったら、やっと「ファンレター」に取り掛かれる。
ファンレターもシナリオにして、最後に手紙でまとめたらいいのではないかとか、迷っている。
。

そしたら、実際の出来事をどう口口に伝えるか表現できるし、いいかなと思う。
でも、連載形式で30話を書く力がわたしにあるだろうか。
30分では一年を表せないだろうから、一話60分かな。そしたら、めっちゃ大作になる。

とらぬ狸の皮算用をしてもしょうがないので、まずは、120分のシナリオを完成させることを目指しましょう。